

〈原著〉

カリキュラム外活動を積極的に導入した教職課程実践に関する一考察

大 矢 一 人 (藤女子大学 文学部 文化総合学科)

本論文は、教職課程カリキュラムの改正に伴って生じた問題点を、カリキュラム外活動を積極的に導入して解決しようとした実践報告である。まず、現在の教職課程の現状を、学年別の受講者数、学校種・公私立別の教育実習者数（中等教育のみ）、そして特別支援学校での介護等体験実施者数から示した。学年別の受講者数は、他大学と同様に学年があがるにつれて減少し、最終的に教育実習に行く学生はおよそ50～70人である。これらの学生のうち、約20%の学生が教職に就くことになる。カリキュラム外活動としては、道教委、札幌市教委、そして幌北小学校でのボランティア活動（道教委主催の「セミナー」を含む）とともに、教職課程講座・学外講師招聘・学校訪問（授業見学）などの実施状況をまとめた。2014年度の3・4年生90人のうち88人は、少なくとも一度はカリキュラム外活動に参加している。ボランティア活動に参加している学生は、「教育実習前に本物の学校に生でふれることができた」など、高い評価をしている。最後に今後の課題として、カリキュラム外活動の組織化、一度も参加しない学生への指導、一部の学生の意識の欠如をあげ、その対応についてふれた。

キーワード：教職課程、カリキュラム外活動、ボランティア

1. はじめに

本論は、「教職実践演習」導入に伴い、本学教職課程カリキュラムに生じた問題点を、カリキュラム外活動を積極的に導入するという方策によって解決しようとした実践報告である。その結果が最終的に出ているとはまだ言えないが、ある程度の実践が行われたと筆者は考えるため、ここに報告する。本論はまた、拙論「介護等体験実施から10年を経過して—その総括と今後の課題—」¹⁾で記した2008年度までの報告以降の本学教職課程の活動報告ともなる。

「教職実践演習」は、いわば教職カリキュラムの総仕上げとして位置づく科目である。受講する学生が、教育職員免許状を取得するにふさわしい人間であるか否かを大学側が最終的に判断するために置かれたとされる。よってほとんどの場合、4年制大学においては4年後期に設定される2単位の科目となる。この科目が2010年度入学生から適用されることになったため、本学教職課程カリキュラムにある問題点が生じた。

本学は地方の小規模大学であり、のちに詳細な人数を示すことになるが、最終的に中等教育に関して

40～50人、栄養教育に関して10人程度が教育実習に行く大きさを有する教職課程を持っている。2学部6学科で、定員合計は80人×6学科=480人であり、このうち4学科が中等教育に関係する学科、1学科が栄養教育に関係する学科、さらにもう一つが幼児教育に関係する学科である。中等教育と栄養教育の教職課程専任教員は規程上2人であるが、本学では専任2人（大矢一人、伊井義人）に嘱託専任1人（太田眞）が配置されている。1学年あたりの定員規模で320人（4学科）、受講生規模で約100人という小規模さを生かして、本学では、中等教育の場合において、専任教員が1年次から4年前期まで継続して講義を持てるように、以下のような科目を配置してきた。

文学部

1年前期…「教師論」（大矢・文学部専任）

1年後期…「教育方法論」（大矢）「教育課程研究」（伊井・人間生活学部専任）

2年前期…「教育原理」（伊井）

2年集中…「介護等体験」（大矢）

2年後期…「教育制度論」（伊井・専任）

(それ以外に、太田(文学部嘱託専任)が2～3年前後期に文化総合学科の社会科学関係の「教科教育法」を担当)

3年前期…「教育実習ⅠA」(大矢)「特別活動」(伊井)「生徒指導」(太田)

3年後期…「教育実習ⅠB」(大矢)「道德教育」(大矢)「教育相談」(太田)

4年前期…「総合演習」(大矢)

4年集中…「教育実習Ⅱ・Ⅲ」(太田)

人間生活学部

1年前期…「教師論」(大矢)

1年後期…「教育方法論」(大矢)「教育課程研究」(伊井)

2年前期…「教育原理」(伊井)

2年集中…「介護等体験」(大矢)

2年後期…「教育制度論」(伊井)

3年前期…「教育実習ⅠA」(伊井)「特別活動」(伊井)「生徒指導」(太田)

3年後期…「教育実習ⅠB」(伊井)「道德教育」(大矢)「教育相談」(太田)

4年前期…「総合演習」(伊井)

4年集中…「教育実習Ⅱ・Ⅲ」(太田)

本学に特徴的なカリキュラムは、「教育実習ⅠA・B」という科目である。これは教育実習事前事後指導にあたるもので、教育職員免許法の規定上は1単位(15時間)でよいものである。これを本学では2単位×2種=4単位(60時間)とし、教育実習の事前事後指導を丁寧に行なってきた。

ともあれ、このカリキュラムをみると、文学部においては太田(専任)が1年前期から4年前期まで、人間生活学部においては伊井(専任)が1年後期から4年前期まで、継続して授業を行っており、太田(嘱託専任)が3年より両学部を担当していることがわかるであろう。文学部は、大矢が主担当として授業外の学生の相談にあたり、一方で人間生活学部では伊井が主担当として同様な立場にいるわけである。もちろん、文学部主担当である大矢は、2年次においては集中講義である「介護等体験」の担当でしかなく、また人間生活学部主担当である伊井は1年後期からしか担当がないといった隙間もあるが、ある程度、1年から4年まで継続して担当できていたわけである。それは地方にある小規模の私立大学教職課程において、学生指導という点で有効に働いてきたと考えられる。

ところが、「総合演習」のかわりに「教職実践演習」が配置され、4年後期にまで授業を行う必要がでてきた。授業が後期にまで伸びたわけで、専任教員が継続

して指導するためには、教職に関する科目の配置を変更せざるを得なくなったのである。

「2」では、本学教職課程がこれをどうクリアしようと試みたのか、そしてその結果がどうなっているのかを明らかにする。

2. 問題点の解決と教職課程の現状、そしてさらなる問題点

(1) 問題点の克服

以上のような問題点を、本学教職課程では次のようにクリアしようとした。すなわち、「教育実習ⅠA・B」(3年前・後期)の開講時期をうしろにずらして3年後期・4年前期とし、それまで4年前期にあった「総合演習」を廃止するかわりに、「教職実践演習」を4年後期に配置したのである。これによって少なくとも3年後期から4年後期にかけて専任である大矢・伊井が各学部の授業を受け持つという体制は維持された。しかし教育実習の内諾など、事務的に非常に大事な時期である3年前期に、大矢が文学部で授業を持たないという状況が生じた。それを改善するために、これまで1年後期に配置されていた「教育方法論」を3年前期に移すこととした。これによって3年前期において、両学部で、専任である大矢・伊井と嘱託専任である太田が授業を受け持つ体制が整った。

もちろんこのように配置したことによるデメリットもある。大矢は、主担当である文学部も含めて両学部において、1年後期から2年後期までの1年半の間、直接の授業を持たなくなった。さらにのちにみるように「介護等体験」の開講時期を2年から3年に移すという改正も行ったため、直接の授業外においても学生と接する機会が1年後期から2年後期にかけては非常に少なくなってしまった。

そのため、別の案も実際には検討した。すなわち、「教育方法論」の開講時期は変更せず、「教育実習ⅠA」を3年前期に、「教育実習ⅠB」を隔週開講にして3年後期から4年前期に配置するというものである。しかしこの案は、「教育実習ⅠB」を一度休講したり学生が休んだりすると、授業の間隔が1か月も空いてしまうという問題があり、没となった。

よってデメリットが存在することは確かであるが、現実には上記のようなカリキュラムになってしまった。逆に言えば、1年から2年にかけてそのようなことが起こってしまったとしても、3年以降の継続した講義開設を重視したわけである(最終的な改正は、図1参照)。

	1 年前期	後期	2 年前期	後期	3 年前期	後期	4 年前期	後期
カリキュラム改正前		教育方法論			教育実習 I A	教育実習 I B	総合演習	
改正後					教育方法論	教育実習 I A	教育実習 I B	教職実践演習

図 1 改正前後の科目移動

(2) 教職課程の現状

それではここで、中等教育と栄養教育に関係する本学教職課程の現状について、述べておきたい。表 1 は、過去 6 年間の学年別の教職課程受講者数の推移である。2000 年度の免許法改正以降、教職に関する科目が増大したため受講生は減少したが、そのままの形で過去 6 年間も推移し、教育実習に行く、すなわち 4 年生の受講生は、中等教育ではおおよそ 40～50 人となっている。本学では 2005 年度入学生から栄養教諭の免許を取得できるようにした。食物栄養学科の意向もあり、最初の時期は学科定員 80 人のうち、約半数である 40 人程度が受講していたが、だんだんと減少し 20 人程度から、さらに近年は 10 人前後となっている。

他大学でも同様であるが、教職課程受講者数は学年を追うごとに大きく減少する。それが表 1 にもはつき

りと示されており、中等教育に関して 2011 年度入学生は、1 年生のときには文学部で 87 人、人間生活学部人間生活学科で 37 人であったものが、4 年生のときにはそれぞれ 35 人、7 人と半分以下となっている。1 年生の時には教職課程も受講して免許を取ろうと考えていた学生も、学年がだんだんと上がるにつれ、適性の問題や進路を考えるなかで教職課程をやめていったわけである。

表 2 は、中等教育の教諭を志望する、すなわち文学部と人間生活学部人間生活学科で 4 年次に教育実習に行った学生を取り上げ、学校種・公私立別に実習校を分けてまとめたものである。表 1 の年度と意味が異なるため若干説明すると、2009 年度入学生は 2012 年度に、2010 年度入学生は 2013 年度に教育実習を行なっている。

他大学と比べるなら、私立学校の数値が多いかもしれない。これは同じ敷地内に藤女子中・高等学校が存在するためである。さらに私立中・高等学校のなかには、同一法人の高校（北見藤、旭川藤）が含まれている。それら 3 校からは、特別推薦入試を経て本学に入学した学生が一定数存在する。

表 3 は、特別支援学校における「介護等体験」の実施者数と受け入れ校別の人数である。拙論と同じ形の表としている。まず 2013 年度の人数が極端に少ない理由は、この年に体験の開講年度を 2 年から 3 年に変更したことによる。2012 年度には 2 年生が体験し、2013 年度から 3 年生が体験することになったため、実際には 2013 年度には 2012 年度に様々な理由で（具体的には、編入や留学などの理由である）、体験を行なうことができなかった学生のみが体験を行なったのである。それを除けば、2012 年度までの体験者数は 60 人程度であった。それが 3 年生実施によって、45 人と減少した。これは 2 年から 3 年にかけて、教職課程受講者が

表 1 学年別の教職課程受講生数

		1 年	2 年	3 年	4 年
2009 年 4 月入学生	文学部	63	57	32	31
	人生・人生	29	22	18	18
	人生・食栄	36	24	24	24
2010 年 4 月入学生	文学部	56	47	35	34
	人生・人生	35	26	17	15
	人生・食栄	24	17	17	16
2011 年 4 月入学生	文学部	87	67	41	35
	人生・人生	37	14	8	7
	人生・食栄	25	11	8	7
2012 年 4 月入学生	文学部	66	47	32	
	人生・人生	32	13	12	
	人生・食栄	22	12	12	
2013 年 4 月入学生	文学部	77	50		
	人生・人生	43	25		
	人生・食栄	14	9		
2014 年 4 月入学生	文学部	71			
	人生・人生	42			
	人生・食栄	20			

表 2 学校種・公私立別の教育実習者数（中等教育のみ）

	2009	2010	2011	2012	2013	2014	
合計	67	55	53	49	49	42	
北海道立中学校	15	8	11	12	10	6	62※
札幌市立中学校	4	3	1	2	0	4	14
公立高等学校	26	25	28	20	24	16	139
私立中・高等学校	8	10	10	9	8	11	56
藤女子中学・高等学校	14	9	3	6	7	5	44

※北海道教育大学附属中学校を含む

表 3 特別支援学校での介護等体験実施者数

	2009	2010	2011	2012	2013	2014	
合計	59	66	64	64	5	45	
北海道札幌養護学校						16	16
北海道札幌聾学校					5	29	34
北海道手稲養護学校			3				3
北海道拓北養護学校	40	54	50	52			196
札幌市立北翔養護学校	6						6
北海道南幌養護学校	3						3
北海道高等聾学校		2					2
北海道小樽高等支援学校			8	12			20
北海道函館盲学校		1					1
北海道五稜郭支援学校			1				1
北海道七飯養護学校	1						1
北海道夕張高等養護学校		1					1
北海道美深高等養護学校		1					1
北海道東川養護学校	2						2
北海道小平高等養護学校	1						1
北海道紋別養護学校		1					1
北海道室蘭養護学校			1				1
北海道伊達高等養護学校	1	4					5
北海道帯広養護学校	3	1					4
北海道釧路養護学校	2		1				3
北海道中標津高等養護学校		1					1

減少するからである。

一方、上記の表1の2011年度入学生までの2年生および2012年度入学生の3年生の人数と、「介護等体験」実施者数を比較すると、近年になるほど人数が近い値になっている。たとえば2009年度入学生は2年生のときに中等教育で79人であったが、「介護等体験」実施者は66人であった。ところが2011年度入学生の場合には83人と64人、さらに「介護等体験」が3年開講に変更になった2012年度入学生の場合には、3年生で比べると、44人と45人となっている(介護等体験実施者の方が多いの、4年生1人が体験しているからである)。

これは、「介護等体験」実施者(中学校免許取得者)数と教職課程受講者数が非常に近い数字になっているということである。すなわち教職受講生の多くが、高校免許だけでなく、中学校免許も取得するようになったことを示す。本学では1年次のオリエンテーションから一貫して、「本当に教職に就きたいと考えている人は、双方の免許を取得するように」と指導しており、教職受講生が減少するなか、教職志望の意志が強い学生が残るようになったことを示していると思われる。

(3) 「介護等体験」の開講学年変更一さらなる問題点

それではなぜ本学で、「介護等体験」の開講学年を変更したのか。多くの大学において「介護等体験」は3

年次に実施される。教職志望の学生を絞ってから、大学を離れた活動を実施させようと考えているからであろう。そのような現状のなかで、あえて本学が2年次に配置していたのは「学生に少しでも、教育現場もしくはそれに類する場を経験させたい」という考えによる。その考えは「介護等体験」が設定された当初からのものであり、本学に短大があった時期には、あえて1年次に「介護等体験」を設定していた。

しかし時は移り、2年次に行くことに問題が生じてきた。一番のそれは、教職課程を辞退する学生の存在である。「介護等体験」を2年次に設定するということは、入学して1年経ち、2年生になったばかりの学生が「介護等体験」の申し込みをしなくてはならないことを意味する。その結果、途中で教職課程を辞退する学生が何人もでてくるのである。体験の実施当初は、教職課程を辞退した学生であっても「介護等体験」に行かせていた。しかし、辞退の学生数が1、2人からそれ以上となり、休学や退学の学生もいるという状況のなかで、体験の事前指導などが十分に行うことができないうまされた。また行かせることで、体験先の学校や社会福祉施設に迷惑をかけることにならないかといった危惧もでてきた。そのため、2012年度から変更を行なったのである。

また、これと関連して人間生活学部人間生活学科においては、「介護等体験」の免除規定を採用した。人間生活学科においては、高校福祉の免許を取得すること

ができ、さらに社会福祉士資格を取得するコースもある。そのコースの中に「ソーシャルワーク実習」という実習があり、その実習が「介護等体験」のうち、社会福祉施設での体験の代替とすることができたのである。これまでは「介護等体験」も「ソーシャルワーク実習」も2年次に実施されており、重複している学生が把握しにくいこと、2年生の時期であれば少しでも多くの体験を行なったほうがよいという理由から、免除規定は採用してこなかった。しかし「介護等体験」を3年次に開設することから、学生の把握も容易になり、また3年次の学生の忙しさも勘案して、免除規定を採用することとした。なお、本学では「介護等体験」を単位化しているが(1単位)、免除規定を使った学生には単位を出していない。ちなみに2014年度においてこの免除規定を使用した学生は、人間生活学科3年の教職受講生13人のうち10人である。これだけ、教職課程受講生と社会福祉士資格を取得するコースの学生が重なっているということになる。

このような開講時期変更は、あらたな問題点を生み出した。すなわち「学生に少しでも、教育現場もしくはそれに類する場を経験させたい」という考えが使えなくなったということである。よって(1)で記したように、1年から2年次にかけての専任教員の学生との直接の授業が減ったこととともに、学生自体も2年までに教育現場における経験ができないという問題点が生まれたのである。それを解決するための方策が、「カリキュラム外活動を積極的に導入する」という方策である。これを以下でみてみたい。

3. カリキュラム外活動の内容

(1) ボランティア活動の導入

カリキュラム外活動の積極的導入の方策の一つは、ボランティア活動の導入である。これまで本学では、人間生活学部において学部による石狩市立小学校へのボランティア活動(通称、SAT: School Assistant Teacher)が行われていた。2000年からの事業であり、5年前からは、教職課程専任である伊井が担当している。教職課程が実施しているものではないが、例年保育学科も含めて30人程度の希望者があり、実際の活動者数はおよそ15人である。伊井が着任以降、石狩市厚田区にある厚田中学校へのSATも実施されている²⁾。

しかし、文学部においては、学部主催のボランティアは公的には実施されてはいなかった。そこで学生が教育現場を実施できる機会が与えられる外部のボランティア活動といった事業に積極的に参加する道を検討

したのである。ここでは、その例を3つあげることとする。

第一に、北海道教育委員会主催による「学生サポーター(学生ボランティア)事業」である。この事業は「道内の市町村等が実施する教育活動を支援する」学校サポーターを募集するものであり、道教委は登録のメリットとして、①子どもたちと直接関わることができる、②事前にボランティアに対する考え方や子どもとの関わり方を学ぶことができる、③全道各地で活躍するチャンスを手に入れることができる、④他大学の学生と交流することができる、の4つを挙げている。②について補足するならば、ボランティアに参加するためには、半日程度の派遣前研修を受ける必要がある、そこで実践前に理論的な学習を行なうことになるのである。本学では、3月末もしくは4月上旬に道教委の担当者から、前年度の本学学生の様子をうかがい、さらに次年度の募集についての説明をうけるという形をとっていた。さらに担当者からの要望により、2014年度からは文学部の1~2年の教職課程の授業において、道教委担当官による約20分間の説明をしてもらった。これによって登録人数は飛躍的に伸びることになった。

このボランティアと関連する道教委による事業をここで説明しておく。それは「北海道教員志願者養成セミナー」である。この事業は、「北海道の教員を目指す意欲ある短大生・大学生・大学院生や社会人に、教育の重要性や知識、指導力について理解を深めてもらうとともに、教職に対する意欲・情熱の醸成を図」(道教委HP)ることを目的に、2009年度から実施されているものである。基本講座(2日間で、8~9月、9~10月の土曜日に実施)では「北海道の教育の実情や教員として必要な知識等についての講話・講義、演習、パネルディスカッション及び北海道の教員採用選考の実施内容の説明など」が行なわれる。また学校体験(3日間で8~9月の平日に実施)では、「学校における授業参観、担当教員等の日常の教科指導や業務全般の観察、総合的な学習の時間や学校行事等の補助に参加」などが行なわれる。

本学では教職課程の授業において、その案内などを配布して説明し、積極的に参加を呼びかけた。また「セミナー」のうち、「学校体験」が本学後期の授業日と重なるため、2011年度から教職課程からの特別な「欠席届」を作成し、学生が授業を欠席することに対して先生方への配慮をお願いした。本学の欠席届は、忌引きといった「特別欠席届」と教育実習といった本学カリキュラムに関係する「公認欠席届」だけが存在し、大学外の機関による行事参加に対応する届が存在しな

かったためである。

第二に、札幌市教育委員会による学生ボランティア事業である。札幌市教委では2003年度以降、大学と学生ボランティアの派遣に関する協定を結び、事業を推進してきた。その目的は「学校の教育活動を支援する学校外からの参加・協力の一方策として、大学において募集する学生を各学校に派遣することを通し、子ども一人一人の状況に応じた支援を期待するとともに、学生のボランティア意識の高まりや資質の向上、さらに将来、教職に就く上での動機付けにする」(「学生ボランティア事業」実施要項第1条)ことである。活動内容は、学校イベントの手伝いから、授業についていけない児童生徒への支援など多岐にわたっている。2011年度までに北海道教育大札幌校などの4大学と締結済みであったが、2012年5月11日に、あらたに13大学・短大と協定を結んだ³⁾。本学もその中に含まれているわけである。大学内の募集は、札幌市教委の担当者に文学部のある北16条キャンパスで、昼休みに説明会を開催してもらっている。その際には、札幌市教委作成による『学生ボランティアハンドブック』も使用している。参加者は、およそ30人である。人間生活学部がある花川キャンパスでは、専任教員が昼休みを使って、ハンドブックも使用して説明会を開催している。

第三に、札幌市立幌北小学校による「放課後子ども勉強相談室」への学習支援ボランティアである。「相談室」は主に、理解度に差が付きやすい「算数の勉強で困っている子どもたちを支援するために、2010年度11月より開設」された⁴⁾。火曜日の14:30から16:40ごろまで月に2~3回程度開かれており、北海道大学や北海道教育大札幌校の学生がボランティアにあたった。そのボランティアに本学も2011年度より参加したのである。募集は、教職課程の授業で行なった。教頭先生や担当の先生が大学にお越しになって、およそ20分程度の説明を、年度によって違いがあるが文学部1~3年の教職課程受講生に行なった。

なお、これ以外に学校からのボランティア依頼もある。たとえば、当別町、北海道飛鳥未来高等学校、東京大志学園札幌校などである。北海道飛鳥未来高等学校は広域通信制の高校であり、東京大志学園は、不登校の小中学生の学校復帰を支援する公益財団法人である。本学では、2010~11年度に当別町のボランティアに学生が参加した⁵⁾。

(2) 教職課程講座の実施と学外講師の招聘

カリキュラム外活動の積極的導入の方策の二つ目は、授業以外において、教職課程主催による様々な事

業を行なうことである。

その一つは、教職課程講座の実施である。これは本論で検討しているカリキュラム外活動の実施を意図して開催したものでない。2010年度に嘱託専任となった太田が、これまでの高校教員・道教委の行政職務などのキャリアを生かして、前北海道教育委員会教育長であった吉田洋一氏を招いたことから始まる。学生の感想によるとやはりインパクトが強かったようで、吉田氏を翌週の太田の授業にもう一度招くことになった(のちの表6参照)。ともあれ、このような企画をきっかけに少なくとも年に一度は学外の先生を招くことにした。

表4は、2010年度からの教職課程講座の開催状況である。およそ年に一度の開催で、参加人数は、最近は40~50人と一定している。この人数には、卒業生や学外者も含まれている。2014年7月に開催された講演会は、表にもあるように大学主催であるが、太田が中心に行なった講演会であるため、ここに掲げた。講演会の後半には表に記した2人に加え、西堀隆亮氏(北海道足寄高等学校校長)と鎌倉真智栄氏(北海道白陵高等学校元PTA会長)でシンポジウムも行なわれた⁶⁾。

また講座と関連して、教職課程の授業内に学外講師を招聘することも積極的に行なった。表5は、それをまとめたものである。「福祉科教育法」で毎年度行ない(後述)、「教育相談」に関しても、毎年度、鎌倉真智栄さんを招いて「個別の課題を抱える生徒への指導」に関して話していただいている。なお、栄養教諭の講義については、2010年度以前より積極的に学外講師を招聘しているが、ここには掲げていない。

(3) 学校訪問(授業見学)

学外からの講師を招いて、カリキュラム内外において講演などを行なってもらう一方で、本学学生自らが学校などを訪問し、授業を見学させていただく活動も、積極的に行なった。これについては、「福祉科教育法」を担当されている加藤聖子先生が、学外講師として北海道石狩翔陽高等学校の教員を招聘するとともに、こちらから高校へ出向くという形で始まった。これについて説明するならば、人間生活学科では2010年度以前から高大連携の一環で、大学側から石狩翔陽高等学校へ出前授業に出かけていた。それでは本来の意味で「連携」が出来ていないのではないかという意見が出てきており、2010年度になってから高校側からも大学へ何か協力をしていただき、双方向での協力体制をつくらうということになった。そして、当時北海道石狩翔陽高等学校に在職中の長尾勝恵先生(現在は平取高等学校)が「福祉科教育法」のゲストスピーカーとしての

表4 教職課程講座

年度	日にち	講演・講話者	タイトル	参加者
2010年	10月23日(土)	吉田洋一(前北海道教育委員会教育長)	「教育行政が期待する教師像—プロの教師を目指せ—」	100人程度
2011年	10月29日(土)	工藤泰三(筑波大学附属坂戸高等学校教諭) 坂本建一郎(時事通信社編集委員)	「授業力向上ワークショップ」	25人程度
2012年	12月1日(土)	石垣総静(北海道新聞社社会部教育記事担当記者)	「新聞記者からみた北海道の教育」	40人程度
2013年	11月23日(土)	山田洋一(北広島市立大曲東小学校教諭) 笹森健司(千歳市勇舞中学校教諭)	全体タイトル「未来を創る教員を目指すあなたへ」 「心が動く道徳の時間の進め方」(山田) 「学校教員になるために準備しておくこと」(笹森)	40人程度
	11月30日(土)	宮森正人(北海道札幌開成高等学校教諭)	「動きを作る仕掛け ～させるからしたくさせるへ～」	40人程度
	3月15日(土)	武藤久慶(北海道教育委員会) 山田洋一(同上)	「北海道の子供たちの深刻な状況：基礎学力問題 ディープインパクト」	40人程度
2014年	(大学主催) 7月19日(土)	横山 巖(大阪弁護士会弁護士・大津市立中学校におけるいじめに関する第三者委員会委員長) 佐藤裕之(北海道教育委員会学校教育局いじめ問題対策チーム主幹)	「いじめと向き合う—意識改革—」	130人程度
	1月11日(日)	飛谷未来(札幌市立石山南小学校栄養教諭) 須合幸司(札幌市立平岸高台小学校教諭)	栄養教諭に聞く！ 学校ではたらく栄養士の本音と未来	50人程度
	3月14日(日)	平山雅一(砂川市立砂川中学校) 笹森健二(千歳市立勇舞中学校)	4月から役立つ「授業力」向上ワークショップ	50人程度
		飛谷未来(札幌市立石山南小学校) 須合幸司(札幌市立平岸高台小学校) 山田洋一(北広島市立大曲東小学校)		

表5 学外講師の招聘

年度	日にち	対象講義	講師	内容
2010年	7月7日(水)	生徒指導(北16条)	清澤智克(北海道教育委員会学校教育局参事生徒指導グループ)	生徒指導の現状と課題
	7月9日(金)	生徒指導(花川)	清澤智克(同上)	生徒指導の現状と課題
	11月24日(水)	教育相談(北16条)	吉田洋一(前北海道教育委員会教育長)	(続)教育行政が期待する教師像—プロの教師を目指せ—
	1月14日(金)	福祉科教育法(花川)	長尾勝恵(北海道石狩翔陽高等学校教諭)	(模擬授業)コミュニケーションの基礎について(社会福祉基礎) (講義)福祉科教育の現状、教材研究等について
2011年	7月27日(水)	生徒指導(北16条)	山崎 誠(北海道札幌東豊高等学校教頭)	生徒指導の現状と課題
	11月10日(木)	地歴科教育法(北16条)	小形秀雄(北海道深川東高等学校校長)	北海道の教育と教員採用
	11月10日(木)	地歴科教育法(北16条)	堂徳将人(北海道商科大学教授)	観点別評価の実際 (模擬授業)バイタルサインについて(こころとからだの理解)
	12月18日(金)	福祉科教育法(花川)	長尾勝恵(北海道石狩翔陽高等学校教諭)	(講義)福祉科教育の現状、教材研究について
2012年	10月24日(水)	教育相談(北16条)	岡島礼久(北海道札幌東豊高等学校教諭)	東豊高校を訪問していただいて
	11月20日(火)	教育制度論(花川)	高石康広(石狩市教育委員会)	教育委員会について
	12月12日(水)	教育相談(北16条)	鎌倉真智栄(北海道札幌白陵高等学校元PTA会長)	個別の課題を抱える生徒への指導
	1月18日(金)	福祉科教育法(花川)	佐藤陽子(北海道石狩翔陽高等学校教諭)	(模擬授業)手話について(社会福祉基礎) (講義)福祉科教育の現状、教材研究等について
2013年	1月21日(月)	教育相談(花川)	鎌倉真智栄(前掲)	個別の課題を抱える生徒への指導
	9月25日(水)	教育相談(北16条)	喜多見彰彦(北海道札幌月寒高校教諭)	生徒指導と教育相談
	12月11日(水)	教育相談(北16条)	鎌倉真智栄(前掲)	個別の課題を抱える生徒への指導 (模擬授業)出生前診断について(社会福祉基礎)
	12月20日(金)	福祉科教育法(花川)	佐藤陽子(前掲)	(講義)福祉科教育の現状、教材研究等について
2014年	1月20日(月)	教育相談(花川)	鎌倉真智栄(前掲)	個別の課題を抱える生徒への指導
	10月8日(木)	教育課程研究(花川)	安田智代(小樽市立花園小学校栄養教諭)	栄養教諭とは
	11月6日(木)	地歴科教育法(北16条)	伊東清文(北海道総務部北方領土対策本部)	北方領土をどう考えるか
			松尾秀治(千島歯舞諸島居住者連盟) 小田島梶子(千島歯舞諸島居住者連盟)	
	11月7日(金)	教育制度論(北16条)	江口 彰(NPO法人いききたす「カタリバ北海道」代表)	カタリバについて
	1月19日(月)	教育相談(花川)	鎌倉真智栄(前掲)	個別の課題を抱える生徒への指導
1月21日(水)	教育相談(北16条)	鎌倉真智栄(同上)	個別の課題を抱える生徒への指導	
1月23日(金)	福祉科教育法(花川)	宮澤明美(北海道石狩翔陽高等学校教諭)	(模擬授業)口腔ケア(介護実践II) (講義)福祉科教育の現状、教材研究等について	

協力を申し出てくださった。長尾先生は北星学園大や北翔大、札幌学院大など、複数の大学の福祉科教育法のゲストスピーカーを経験されていたこともあり、快く協力を名乗り出てくださった。またちょうどそのころ加藤聖子先生が2年目で、高校福祉科の状況を学生に話せる先生か、授業見学をさせてくださる高校はないものかと思案していたところに、伊井が仲介役となってこの話をもってきた。よって学外講師の招聘と授業見学をいっぺんに行なうことができるようになったのである。

また、2011年度からは、嘱託専任の太田の尽力により、北海道札幌東豊高等学校訪問も始まった。これについては、太田本人による「教職課程学生の高校訪問」⁷⁾に詳しいが、太田はこの論文で「筆者が勤務する大学の教職課程履修学生の中学校や高等学校に対する認識は、それぞれの出身校の経験によるものである。さらに、出身校での教育実習が多いことから、ほとんどの学生は学校といえば母校しか知らないまま公立中学校・高校の教員として採用されることになる。／そこで、採用までにできるだけ多くの経験をさせ、教職に対する意識を少しでも確かなものにして教員になってほしいとの思いから高校訪問を企画し、実践した」としている。まさに、学校に関する「できるだけ多くの経験」が重要なのである。

表6はそれらをまとめたものである。日にちの欄を見ると、授業時に行なわれているものと長期休暇中に行なわれているものがある。また、授業の一環として行なわれているものとそうでないものも混在している。さらに非常に小人数による見学ツアーなどを含められている。これらのうち、定期的に行なわれているのは、上記でも述べた「福祉科教育法」に関連した北海道石狩翔陽高等学校、長期期間中の北海道札幌東豊高等学校訪問、北海道札幌厚別高等学校、そして江別市立大麻中学校への訪問などである。なお、「教職実践演習(人間生活学科)」に関連した石狩市内への施設訪問については、伊井による「石狩市における地域資源を活用した教職実践演習の試み—藤女子大学人間生活学科の事例—」⁸⁾に詳しい。

また、2013年9月の「北方領土ゼミナール」は、北方領土復帰期成同盟(代表 堀達夫)主催によるもので、年に一度、全国の大学生を根室に集めて施設見学やグループワークを行なっている。この年のゼミナールに北海道の代表として本学学生2人を派遣してほしいということで、学生に公募を行なった。文学部日本語日本文学科3年3人、文化総合学科4年1人、2年1人の総計5人の応募があり、教職課程委員会委員3人による面接を行なって、文総4年1人、日文3年1

人を選抜し、派遣した。両名は翌年1月に東京で開催されたフォーラムにも参加している。

(4) 教員採用検査対策勉強会

方策として実施したものではないが、大矢が2000年度以前から実施していたものに、教員採用試験対策勉強会がある。教職課程教員によるカリキュラム外活動であるという点から、ここで説明をしておく。

北海道と札幌市の教員採用検査が、筆記による一次検査と面接・実技による二次検査に分かれるので、対策の勉強会も二種に分かれる。一次検査は、全国的に一番早い6月末に実施される。それにあわせての勉強会は、2013年度から開始された太田による「春休み教採勉強会」よりはじまる。2月下旬の7日間(1日の時間はおよそ10:30~14:30)で、対象は新4年生であり、2013年度は約20人が参加し、2014年度もほぼ同様である。太田が指導者となって、学習指導要領・教育法規・教育時事の解説をしながら、協同出版の『教職課程』に掲載されている演習問題を解く形式である。毎日、過去の教員採用選考検査(一般・教職教養)の実際の問題を試験する形式も含まれている。また、各学生が受ける学校種の教科の専門教養の問題も配付し、春休みの宿題として課して提出させる。

大矢は、2012年度までは4月から、2013年度は2013年3月末から、「教職教養勉強会」を行なっている。あらかじめ大矢が作成した過去25年間分の「〈領域別〉北海道教職教養問題」を学生に配布しておき、領域ごとに問題を解きながら解説を加えていくという形である。その領域は、道徳教育、教育評価、教育法規、教育史、教育心理学、教育課程・方法、特別活動・障害児教育の7種で、教育法規で2回分の時間を取っている。1回の勉強会は、2コマ分(90分×2)であり、3月末は、午前・午後に1コマずつ、4月になると、火・金の6、7コマ目に行なった。新4年生中心であるが、新2年生の参加もあり、毎回15~25人程度の参加者がいた。2014年度は人間生活学部の学生の参加が目立った。

専任である伊井は、「教採ランチ」となづけて、4月以降の昼休みに、伊井による自作の問題を昼食をとりながら解いていくという勉強会を開催している。新4年生が対象であり、人間生活学科ならびに食物栄養学科の学生が参加している。参加人数は5~10人程度である。2014年度からの人間生活学科のカリキュラム改正により「テーマ研究D」(4年対象)が設定され、その内容の中に上記の内容が組み込まれた。食物栄養学科の学生は、単位とは関係なく参加している。

一次検査に続いて、二次検査は近年、8月10日前後

表6 学校訪問（授業見学など）

年度	日にち	学校名	内容	対象・訪問予定人数など
2010年	2月3日(木)	北海道石狩翔陽高等学校	授業見学「解剖学」 教科担当長尾勝恵先生と懇談 校内見学	人間生活学部人間生活学科3年9人
2011年	9月28日(水)	北海道札幌東豊高等学校	授業見学・教科ごとに先生と懇談・校長講話 授業見学「健康福祉実践」バイタルサインについて	文学部3年(文総のみ2年も)27人 (英7、日11、文総3年7、文総2年2)
	2月1日(水)	北海道石狩翔陽高等学校	講義「『福祉マインド』教育の実際」 教科担当の長尾勝恵先生と懇談 校内見学	人間生活学部人間生活学科3年8人
2012年	9月6日(木)	北海道札幌東豊高等学校	授業見学・教科ごとに先生と懇談・校長講話	文学部3年(日文のみ2年も)および人間生活学部3年18人(英2、日文3年8、日文2年1、文総3年2、人生5)
	11月30日(金)	札幌市立幌北小学校	校内見学・校長講話「危機管理について」	文学部2年約50人
	12月4日(火)	石狩市立紅南小学校	校内見学・授業見学(電子黒板使用) 授業見学「日本がもし100人の村だったら～生活保護制度について」 教科担当の佐藤陽子先生と懇談 校内見学	人間生活学部2年約30人 人間生活学部人間生活学科3年12人
2013年	8月24日(土)～26日(月)	北方領土現地見学研修	北海道根室西高等学校・ノシャップ岬などの見学 北方領土復帰規制連盟の方のお話	文化総合学科3年6人
	8月29日(木)	北海道札幌東豊高等学校	授業見学・教科ごとに先生と懇談・校長講話	文学部3年(日文・文総のみ2年も)および人間生活学部3年44人(英9、日文3年13、日文2年2、文総3年4、文総2年11、人生5) (北方領土復帰期成同盟主催、於根室市)
	9月9日(月)～12日(木)	「北方領土セミナー」	施設見学・グループワークなど	学生2人(文総4年1、日文3年1)
	9月26日(木)	江別市立大麻中学校	社会科系授業見学・先生と懇談	文化総合学科2、3年17人(3年6、2年11)
	9月26日(木)	北海道札幌月寒高等学校	英語科授業見学・先生との懇談	英語文化学科3、4年11人(4年2、3年9)
	10月8日(火)	石狩市施設(右欄参照)	施設見学(相談支援センター、社会福祉協議会、市民図書館、子ども未来館)	人間生活学科4年13人
	10月15日(火)	石狩市施設(右欄参照)	施設見学(JAとれの里、リサイクルプラザ、石狩浜海浜植物保護センター、砂丘の丘資料館)	人間生活学科4年13人
	11月29日(金)	旭川地区高等学校(旭川藤、旭川北、旭川東、旭川東栄)	教頭講話、授業見学、先生との懇談	日文3年4人
	2月6日(木)	北海道石狩翔陽高等学校	授業見学「手話」手話の成り立ちについて 教科担当の佐藤陽子先生と懇談	人間生活学部人間生活学科3年3人、4年4人
	3月14日(金)	北海道札幌厚別高等学校	授業見学・先生との懇談	文学部15人(英文3年4、英文2年6、英文1年1、日文3年4)及び人間生活学部人間生活学科3年2人
2014年	8月24日(日)	北海道開拓の村	施設見学・担当の説明	文総3年6人
	8月28日(木)	北海道札幌東豊高等学校	授業見学・教科ごとに先生と懇談・校長講話	文学部3年(文総のみ2年も)および人間生活学部3年27人(英1、日文4、文総3年9、文総2年4、人生9)
	9月3日(水)	江別市立大麻中学校	校長講話、授業見学・先生との懇談	文学部3年(文総のみ2年も)および人間生活学部3年14人(英4、日文3、文総3年4、文総2年2、人生1)
	10月8日(水)	石狩市施設	施設見学	人間生活学科4年7人
	10月15日(水)	石狩市施設(石狩市立図書館)	施設見学	人間生活学科4年7人
	11月14日(金)	札幌市立幌北小学校	校内見学・教頭講話「小学校教育の現状と課題」	文学部4年約30人
	1月30日(金)	北海道石狩翔陽高等学校	授業見学(事例検討学習会) 教科担当の宮澤明美先生と懇談	人間生活学部人間生活学科3年7人
3月18日(水)	北海道札幌厚別高等学校	授業見学・先生との懇談	文学部14人(英文4年1、英文3年3、英文2年1、日文3年2、日文2年5)および人間生活学部3年4人(人2、食2)	

に行なわれる。そのため、本学では、8月上旬に、二次検査対策の勉強会を開催する。それには、二次検査で面接官を担当した経験のある非常勤講師や教職課程委員会の教員などもあわせて8人程度の教員が参加し、一日の午前・午後をかけて実施している。学生の参加者は卒業生も含めて20人以上であり、近年、その数が非常に増えている。その内容は、まず午前中に2

回の模擬集団面接を行なう。以前は、一度は実際に面接をし、もう一度は友達が行なっているのを観察して学ぶという方式をとっていたが、現在は、実際に体験することを重視する点から、このような形にしている。教員2人が面接官となり、討議時間を実際より短めに設定すること以外は、実際の検査とほぼ同内容である。昼食をはさみ、午後の最初に集団面接について各教員

からのコメントをもらい、さらに模擬授業・個人面接の説明を行なう。そのうえで、英語・国語・社会科系・家庭科・栄養に分かれて、実際の面接をする。あらかじめ、実際に過去に出題されたものの中から大学側で選んだ模擬授業課題を示し、待機時間中にその準備をさせる。そのため実際の検査とは課題の検討時間が違うが、それ以外は実際の検査とほぼ同内容である。一人一人の面接が終了後に5分程度のコメントを担当教員2人が行ない、次の学生へという流れになっている。

このような公的な勉強会とともに、学生には、教職課程教員をつかまえて積極的に二次検査の練習に臨むようにサジェッションをする。しかし、7月中は一次検査に受かったかどうか分からないので、あまり積極的ではなく、結果がでた7月末から二次検査に備えることになる。

4. カリキュラム外活動への参加状況とその結果

(1) 道教委主催「学生サポーター」「北海道教員志願者養成セミナー」への参加状況

以上のようなカリキュラム外活動に、学生は実際にどれくらい参加しているのだろうか。またどのような感想をもっているのだろうか。教職課程講座、学校見学、教採勉強会の参加人数やその状況についてはすでに述べたので、ここではまず、ボランティア活動の参加状況について説明する。

まず、道教委主催による「学生サポーター（学生ボランティア）事業」についてであるが、その登録者と参加者の数を表7にまとめた。2012年度以前においても、以下の「セミナー」との関連でボランティア登録を行なわれていたが、本格実施された年度からを掲げている。登録者数は実人数であり、一度登録すると辞退しない限り学生生活中は継続することになる。3で述べたように、2014年度にはじめて道教委担当官による説明を行なったので、75人という非常に多くの学生が登録した。特に1年生の登録がめだった。ただし、それに比すれば実際の参加者は少ない。その理由の一

つは、実施時期の問題がある。担当の方も説明していたが、事業の開催時期がちょうど大学の前期試験期間と重なる場合が多く、学生が参加したくてもなかなかできない状況にあったのである。ここで2013・14年度と継続して事業に参加した日文3年生の感想を記す。

私は、このまま教員という道を選んでいいのか悩んでいたもので、自分自身の気持ちを固めるために、…ボランティアへの参加を始めました。昨年は小学生と中学生を対象とした学習活動の補助、今年は小学生を対象とした自然の中や博物館等の施設での補助や集団での宿泊の補助、雪遊びを通して体力の向上を目指す事業の補助のボランティアに参加しました。

ボランティアを始めただけの頃は、どのように子どもに接したらいいのか戸惑っていましたが、…勉強も運動も一緒に楽しく出来るよう、工夫をする心の余裕が生まれました。…

…ボランティアという立場ですので、私がしたことにも何かあったとしても、全ての責任をとれないことや、子どもたちと仲良くなれたのに、これからの成長に長くは関われない、見守ることが出来ないことにもどかしさを感じています。ですから私は教育のプロになって、長期に渡って子どもと関わりたいと強く思うようになりました。残りの学生生活では、まずは学生という立場で今、私が出来たことを正確に見極めて、その中で、全力で子どもたちと向き合っていきたいと思います。

続いて、「北海道教員志願者養成セミナー」についてである。参加状況を表8に示す。2009年度からの総合計で65人が出席しており、両学部でもそれほど差はない。年平均で約10人参加であるが、一方で年ごとに非常に差があることも特徴的である。このセミナーに2013年度に3年生で参加した文学部の学生の感想を記す。

セミナーに参加して良かったことは、一言でいうと、現場の先生方の話を沢山聞けたことでした。私は、〇〇高校で学校体験をさせていただいたのですが、教頭先生が、高校の歴史や近隣の高校の学習状況、また北海道の教育事情をわかりやすく話してくださり、とても興味深い話を聞くことが出来ました。また、日頃私が疑問に思っていたことにも教頭先生をはじめ、担当の先生方がわざわざ私一人のために、時間を割いて話を聞いてくれたこともセミナーに参加して意味がありました。

いわゆる進学校以外の高校を観察することで、

表7 道教委 学生ボランティアの参加状況

	2012	2013	2014
ボランティア登録者	2	16	75
学習サポート	0	7	18
派遣事業参加者 体験活動	0	4	2
合計	0	11	20

※登録者は実人数、参加者は延べ人数

表8 北海道教員志願者養成セミナー 出席者状況

		2009	2010	2011	2012	2013	2014	総計
文学部	1年	4	0	0	4	0	0	8
	2年	2	4	3	7	2	0	18
	3年	0	0	0	0	3	1	4
	計	6	4	3	11	5	1	30
人間生活学部	1年	1	0	0	3	8	0	12
	2年	0	3	13	0	6	0	22
	3年	0	1	0	0	0	0	1
	計	1	4	13	3	14	0	35
大学全体総計		7	8	16	14	19	1	65

私自身新たな発見や自分の物の見方の狭さに気付くことも出来ました。また教育実習に行く前に、教壇に立って子どもたちに自分の想いを伝え、(全員ではありませんでしたが)何人かの生徒と進路や大学の話をしているうちに、子供たちをサポートして、彼らの将来を見ていきたいという思いが芽生えました。

仕方がありませんが、しいて言うとも学校体験の学校はどこに当たるかわからないため、朝早く交通機関で通うのが大変でしたが、貴重な体験をすることが出来ました。

また、人間生活学部の学生で2011年度に1年生で参加した学生は次のように感想を記している。

セミナーでは、教員の方や教育委員会の方など教育に携わる様々な方々の話を聞いたり、実際に学校体験をしたりということをしました。どの方々も子どもたちのために教育を良くしていきたいという熱意があり、教師の在り方などについて深く考えさせられました。学校体験では実際に現場を見て、大変さも感じましたが、それ以上に楽しさややりがいもあることも感じ、教員になりたいという気持ちがより強くなりました。実習の前にこのセミナーに参加したので、気持ちを高めた状態で実習に臨めたことは非常に良かったと思います。ただ、学校体験に行ったところは栄養教諭がいなかったため、できれば栄養教諭がいる学校に配置していただきたかったです。ですが、このセミナーに参加したことで教員を目指す上でのモチベーションを高めることができたので、参加した意義は非常にありました。

2人とも、最終的に教員採用選考検査に合格し、2015年4月から北海道の教員になる学生である。なお、最後の部分に要望が記されているが、これは筆者が学生にあえて書くように指示したことによる。

(2) 札幌市教委および幌北小学校のボランティア参加状況

続いて札幌市教委および幌北小学校でのボランティアについてである。表9に札幌市教委によるボランティアの状況を記した。例年10人程度となっていることがわかる。幌北小学校については、人数が少ないので掲げない。申し込み自体は例年多く、たとえば2013年度が約35人、2014年度が約25人程度である。しかし活動時間がちょうど大学の3・4コマの授業と重なるため、参加者は少ない。2013年度が3年生で2人、2014年度が2年生1人、4年生が2人という状況になっている。

札幌市教委ボランティアの学生の感想を記す。中学校の特別支援学級で英語を指導した学生のものであり、参加した各回ごとの状況が描かれているので、分量が多くなるが掲げる。2013年度に3年生で参加した文学部の学生である。

〈初回〉まずは教頭先生にあいさつ。学校案内をしていただき、ボランティア内容の詳細を確認した。初めに聞いていたのは、不登校の生徒と話したり、授業のサポートをしたりということであったが、不登校の生徒はあまり学校に来ることがないので、特別支援学級の生徒の授業サポートをすることになった。これから毎週火曜日に来校することになった。

〈二回目〉全教員に紹介したいということで、朝の打ち合わせ前に学校に行く。校長先生へのあい

表9 札幌市教委 学生ボランティアの参加状況

	2012	2013	2014	
1年	1	0	1	2
2年	4	1	1	6
3年	1	10	1	12
4年	1	3	7	11
総合計	7	14	10	31

※総合計は延べ人数

さつもすませた。その後、放送室にて全校生徒へのあいさつも行なった。1時間目から4時間目まで特別支援学級で過ごし、授業のサポートをした。学級の生徒は1人なので、先生と私と生徒で3人。授業内容は、裁縫をしたり日記を書いたり、日常生活で行なうことができるようになるためのものであった。英語の教師を目指していることを告げたので、火曜日の1時間目が英語で、今後授業を担当することになった。

〈三回目〉午前中が調理実習ということで、一緒に近くのスーパーに買い物に行き、さらに調理を手伝った。その後、職員室内の先生を招待し、みんなと一緒に料理を食べた。

〈四回目〉英語といっても、内容的には小学生で行なう外国語活動のようなもので、野菜の絵のカードやフラッシュカードを使ってゲームをした。生徒の集中力が切れやすかったため、こまめに雑談の時間をとり、生徒の好きなハリ・ポッターの話や音楽の話をしたりと集中力をもたせようとした。幸い私も二つのことが好きだったので、後半は生徒の方から話しかけてくれるようになった。この日は、授業というよりコミュニケーションを取ることを目的だったので、その目的は達成できた。

〈五回目〉これ以降私は、火曜日の1時間目で英語を担当することになる。内容としては、前回の復習をし、Good Morning や Good Night などの簡単なあいさつ、タイルを使っての数の数え方を、様々なアクティビティを取り入れて教えた。時には3時間目までいて、音楽の授業でピアノを教えた。

学生は、全体の感想として「1時間の授業丸ごとを担当することになり、責任が重いと感じるがあったが、かなり勉強になった。回数を重ねるごとに少しずつではあるが、生徒の英語力も上がってきていることを実感できたし、何より特別支援学級の生徒の授業や実態を体験できたことが、大変よかった」とまとめ

ている。

幌北小学校でのボランティアについては、2012・13年度の2年間、大学2・3年生として活動した文学部の学生の感想を記す。

最初の頃は、予想以上の児童数とそのパワーに驚きっぱなしで、あつという間に時間が過ぎ、終わるとへとへとになっていました。また全学年対象で学習教科が算数だったため、改めて聞かれると自信を持って答えられない問題も多く、自分の無力さと頼られることに対する責任を感じるが多かったです。…

少しずつ慣れてくると、学年による発達段階の違いや個々の習熟度の差に目を向けられるようになりました。低学年の場合、「できる・できない」に関わらず、集中力が続かないのでプリントが進まないことに気がつきました。そのため常にそばに離れずにいることを心がけましたが、それでも意識を勉強に向けさせることは難しかったので、雑談を織り交ぜながら、できたところはとにかく褒め、意欲を高められるように支援しました。

このボランティアを通して、自分がわかっていることを子どもにわかりやすく伝えるにはどうすればよいかをという壁に何度も直面しました。いつも「どうしてわからないのだろう」という気持ちと「わかりやすく伝えられなくて申し訳ない」という気持ちに挟まれていました。しかし、絵や図を用いながら自分なりにそれを乗り越えられるように努力することで、理解してもらえた時の喜びを得ることができたと思います。「できた!」という子どもたちの笑顔は、ボランティアを続ける糧になっていました。

以上、ボランティアの体験を通して、教えることの難しさ、一方でその喜びを十分に感じている様子がわかるであろう。

(3) 教職課程の教職就職状況

表10は、2009年4月採用以降の状況をまとめたも

表10 教職課程関係就職状況

		2009年4月 採用	2010年4月 採用	2011年4月 採用	2012年4月 採用	2013年4月 採用	2014年4月 採用	2015年4月 採用
公立正式採用	現役	4+1	3+1	2+3	5+1	4+1	5+3	5+3
	既卒	13+1	9+1	4+1	2+0	6+0	7+2	7+1
公立臨時採用	現役	3+1	5+3	0+1	5+0	7+0	6+0	2+1
	私立正採・臨採	3+0	3+0	8+0	7+0	6+0	5+0	1+1
現役合計		10+2	11+4	10+4	17+1	17+1	16+3	8+5
総計		23+3	20+5	14+5	19+1	23+1	23+5	15+6

※○+□については、○が中等教育、□が栄養教育を示す

のである。公立への採用は、北海道と札幌市のみならず、たとえば2014年4月採用では神戸市もある。現役・既卒あわせて毎年およそ15人が合格していることがわかる。ただし既卒については、2011年4月採用以降は、いわゆる公報に、登録者名簿が掲載されなくなったため、本人からの自己申告のみを掲げている。また、多くの都道府県では一次検査と二次検査があるが、一次検査の合格者状況は最終登録者の3～5倍である。本学の北海道・札幌市の一次検査合格者数は、2012年度選考検査(すなわち合格すれば2012年4月に採用となる)で37人(現役20、既卒17)、2013年度で25人(現役11、既卒14)、2014年度で38人(現役21、既卒17)、そして2015年度選考検査で41(現役21、既卒20)である。

最終登録者を現役生のみで取り出してみると、公立および正臨採をあわせて、例年15人程度が教職に就いている。例年、中等教育・栄養教育あわせて50～80人程度が免許を取得して卒業する。卒業生の約20%が教職志望を全うすることになる。なお、栄養教諭になる者は、現役生が多いのが特徴である。

5. おわりに

以上、本学教職課程カリキュラムに生じた問題点を、カリキュラム外活動を積極的に導入するという方策によって解決しようとした実践報告を行なった。まず、現在の教職課程の現状を、学年別の受講者数、学校種・公私立別の教育実習者数(中等教育のみ)、そして特別支援学校での介護等体験実施者数から示した。他大学と同様に学年別の受講者数は、学年があがるにつれて減少し、最終的に教育実習に行く学生は、2013年度の4年生で65人(中等教育49、栄養教育16)、2014年度のそれで49人(中等教育42、栄養教育7)であり、およそ50～70人である。中等教育では、受講生全体の中で、介護等体験を行なう学生が増加しており、これは中学校、高校双方の免許を取得する学生が増えていることを意味している。これらの学生のうち、およそ20～30%の学生が教職に就くことになる。

カリキュラム外活動としては、道教委、札幌市教委、そして幌北小学校でのボランティア活動(道教委主催の「セミナー」を含む)とともに、教職課程講座・学外講師招聘・学校訪問(授業見学)の実施状況をまとめた。ボランティア活動については、学生の感想も示した。ボランティアの経験を重ねた学生は、「教育実習前に本物の学校に生でふれることができた」と高い評価をしている。

2014年度に文学部4年生33人・3年生34人、人間

生活学部3年生23人の総計90人⁹⁾に本論文に掲載された表4(教職課程講座)・表6(学校訪問)を示して、自分が参加したものに○をつける調査を行なったところ、文学部4年生2人以外、すなわち88人は、少なくとも1回は参加していたことがわかった。一番多く参加した者は7回であり、3人いる。すべて文学部4年生である。また6回参加は、全体で6人いる。これらを見ると、ほとんどの学生が一度は、カリキュラム外活動に参加していることがわかる。

しかしカリキュラム外活動に全く参加していない学生が存在することも確かである。この2人は、上記以外のボランティアにも参加していない。それを含めて、以下に今後の課題を記したい。

第一に、カリキュラム外活動を行なっている教員側の問題である。その問題点とは、以上のような活動が組織化されていないということである。本論でもふれたが、教職課程講座や学校訪問などの多くは、嘱託専任の太田の発案による。また、表に記した活動の多くは、教職課程全体で検討したのではなく、伊井をはじめ個人的な営為で行なわれている。教員が独自に活動を行なうことそれ自体には問題はないが、それが教職課程全体として、どのような位置づけになっているかが問われなければならない。たとえば、学校訪問についていうならば、教育実習へ向けて、2年次からどのような流れで訪問させるか、学校種をどのように考えれば良いかといった点が十分に考えられていない現状があるのである。

第二に、学生のボランティア活動への参加傾向である。たとえば札幌市教委のボランティアについてみると、本学が参加してから3年間が経過して、現在4年生で活動を行なってきた者が多い。逆にいえば、その4年生が卒業した後、どれくらいの学生がボランティアに参加するかどうか不明である。また、道教委主催の「セミナー」については、2014年度の参加者が1人と、これまでで最も少なかった。前年が19人と最高の数字であったこと、また2014年度には道教委主催のボランティア活動への参加者が増加したこと、などが関係している可能性もある。しかし学生の参加にやや減少傾向がみられるのが、不安な要素である。

第三に、これと関連して、学校訪問などに見られるのであるが、一度申し込みをしたにもかかわらず欠席する者が多いという問題がある。2013年8月の東豊高等学校訪問でもみられたことであったが、2014年度では参加予定者27人のうちの7人の学生が欠席し、その中には連絡もしない無断欠席者が2人いた。同様の事例は江別市立大麻中学校訪問でもあり、予定者14人のうち4人が欠席し、さらに無断欠席者が2人であった。ポ

ランティア活動や学校訪問などが当たり前のような状況で行なわれているという事態の中で、一部の学生の意識の欠如がみられるのである。

上記に述べた「一度も参加しない学生の存在」、そして「学生の意識の欠如」といった問題についてどのように対処していけばよいのだろうか。学生の意識を高めるために、教員は何をすればよいのか。ボランティア活動も含めたカリキュラム外活動を、強制して行なわせることは、そもそもの趣旨から外れることになる。

そこで、まず手始めに、これらの活動がどれだけ大事なものであるかを知らせることから始めたい。教師になろうと考えている者が、自ら選択してカリキュラム外活動に積極的に参加する意味を知らせたい。そして、一度参加すると決めた場合には、義務や責任が伴うこともしっかりと伝えたい。その上で実際に行なった活動を総括して、参加した学生にとってどれだけ意味があったのかを、参加しなかった学生にも伝えたいと考える。「ふりかえり」というフィードバックが参加者にも欠かせないし、参加しなかった者との共有化も少しは図れるであろう。

情報の提供という点から、2015年度には図書館にある教育学関係の本(NDCで370番台)について、その一部のリストを教職課程の学生全員に配布しようと考えている。それに連動して1年生には、筆者が所有している教育関係の図書を、学生に提供しようと思っている。文庫や新書も含めて、およそ300冊の本があるので、両学部1年生各人に3冊は渡せる勘定である。

教職課程の理念などを公開するという学校教育法改正が2015年4月に施行された。本学でも公開を始めて

おり、本学教職課程はどのような特色を持っているかを検証する時期である。本論に記したことも踏まえて論議を深めたい。

注

- 1) 『藤女子大学 QOL 研究所紀要』第4号、2009年5月、17～26頁。
- 2) この実践に関する報告として、伊井義人「へき地中学校での学習支援を通して育んだ「女子大生と中学生の絆」」(藤女子大学人間生活学部公開講座シリーズ『フューチャースクール×地域の絆@学びの場』六曜社、2014年、119～128頁)がある。
- 3) 『北海道新聞』2012年5月12日。
- 4) 『北海道通信』2011年5月30日号。
- 5) それ以外に、本学教職課程から呼びかけたことがないボランティアなどにも学生は参加している。2014年度に文学部3・4年生であった者に、教育に関係するボランティアに参加したことがあるか聞いたところ、11人が「参加したことがある」「参加している」と答えた。具体的な内容は次のようなものである。
カタリバ北海道、幌北・白揚小学校などでの児童英語活動、えにわ子ども塾(恵庭市教委)
- 6) その内容については、『日本教育新聞—北海道版』(2014年9月15日)が詳しい。
- 7) 北海道私立大学・短期大学教職課程研究連絡協議会『会報』No.32、2013年、15～26頁。
- 8) 北海道私立大学・短期大学教職課程研究連絡協議会『会報』No.34、2015年、1～9頁。
- 9) 人間生活学部人間生活学科4年生7人については調査することができなかった。しかし、7人すべてが、石狩市SATなどのボランティアに参加していることがわかっている。

A Consideration on an Active Approach to Introducing Extracurricular Activities in the Teacher-training Program

Kazuto OYA

(Faculty of Humanities, Department of Arts and Sciences, Fuji Women's University)

This article is a practical report of extracurricular activities which are introduced to solve the problem caused by the revised curriculum for the teacher-training program. Firstly in this article I show the current situation of the program at our university, including the number of the students in the program, the numbers of the students who take the teaching training at public and private secondary schools respectively, and the number of the students who take part in the hands-on activities at schools for the special needs education. The enrollment in the teacher-training program declines as the students' grades advanced, which is typically found in many universities. The final number of the students who take teaching practice in the fourth grade is approximately 50 to 70, and about 20 percent of them engage in teaching after graduation. Secondly, the article summarizes the implementation status of extracurricular activities, including the activities organized by Hokkaido Prefectural Board of Education and Sapporo City Board of Education, volunteer work at Kohoku Elementary School, teacher-training course, lectures by extramural lecturers, and classroom observations. 88 out of 90 third- and fourth-year students take part in the extracurricular activities at least once while in school. The students who participate in the volunteer activities evaluate the activities highly, saying that the activities give them a valuable experience before they practice-teach. Lastly, the report presents future challenges such as systematization of extracurricular activities, instruction to the students who have not participated in the activities, and lack of ethical values in participating students, along with the coping plan to them.

